

環境と福祉

黒羽茂著





290417

環境と福祉

黒羽 茂著



著者紹介

1908年 茨城県水戸市に生まれる。旧制水戸高等学校をへて、東京帝国大学文学部西洋史科卒業、国際政治史・歴史理論専攻、文学博士、日本大学法文学部講師・宮城県女子専門学校教授・東北大学教授・東北大学名誉教授

著 書 『基礎歴史学』『史学概論』『世界史上より見たる日露戦争』『イギリスとアメリカの政治と経済(共著)』『日英同盟の研究』『日米抗争史の研究』『歴史学の世界』『西洋史学思想史』『新西洋史学史』『世界史要説』『日米外交の系譜』『インド法制史大要(共訳)』『歴史よもやま話(共編)』『歴史学の展開』『日露戦争と明石工作』『世界史の構造』他

住 所 〒 982 仙台市松が丘九番十号 TEL 0222(29)1429

環境と福祉

1980年 3月10日 印刷 ￥ 3200

1980年 3月15日 発行

© 著 者 黒 羽 茂

発行者 岸 村 正 路

印刷者 矢 部 富 三

発行所 東京都千代田区西神田 2-4-6 株式会社 南窓社
TEL(261)7617 振替東京 1-96362

1020-406932-5628

はしがき

終戦後のある日、遺伝学者であるO博士と話をしていたとき、たまたま博士が、「どうも日本人は素質として欧米人に劣っているのではあるまいか。理性的な面、理知的な点が乏しく、ことに終戦後の様子をみていると、そんな疑いがもたれる」といわれたことがある。これは私にとっても興味のある話題であったところから、私は民族優劣論について平生もっていた疑問を述べて博士の教えを乞うた。たとえばフランスのゴビノーの民族優劣論は、そのままナチスの民族政策の基礎としてとり入れられ、ゲルマン人の優秀な血液をユダヤ人やアジア人との混血によって汚してはならないということが、ナチス・ドイツ政策の根幹であったことを例証として、次のような質問をした。「もし自然科学的に各民族の血液を調べて比較してみるならば、その優劣を判断できるかどうか。」博士答えていう。「血液で人間の素質を論ずるのは、十九世紀半ごろまでの学問であって、今日では問題にならない。むしろ今日では細胞が基礎的である。そして血液は結果であって原因ではない」と。そこで私はさらにきいた。では、「細胞を調べて比較すれば、民族の優劣が判定できるかどうか」と。博士いう。「その立証は困難である」。

以上の対話からみてもわかるように、今日の自然科学では、民族もしくは人種の優劣を判定することができない。またある民族が他の民族より、自然的素質として特に優っているという証拠もなく、また特に劣っているという証拠もなく、それかといって同等であるという証拠もない。結局自然科学的に民族もしくは人種の優劣を論

することはできないということになる。しかしそれにもかかわらず個人の場合と同じように、民族の間にも何か素質の優劣がありそうに思われてならないのである。すでに触れたようにもし自然科学的にそれを説明することが困難であるとすれば、社会科学の説明を試みるより外はないことになる。そしてわれわれは民族的素質といわれるものが、多くの点において社会的なものであり、歴史的環境の中に形成せられてきたものである。

ところでその特質の少なくともある部分が歴史的に形成せられたものであるとすれば、われわれはその歴史の跡を辿ることによって、民族の心理と文化の由来をあきらかにすることができるよう思うのである。ここに環境歴史学の必要性を見出すのである。

東北福祉大学において、西洋社会福祉史の講義を依頼されてからすでに二年になる。そのさい、いつでも痛感することは、「社会福祉史」とはなんぞやということである。それは歴史とはなんぞやということ以上にむずかしい。全く自信のないまま過ごしてきたというのが偽らざる心境である。しかしその都度学生から、なにか全般적으로よく分かる手ごろの参考書はないかと聞かれたりすると、なかなか注文通りのものがなく、いつもあいまいな返事でお茶を濁すよりほかなかった。なにしろ坊間にはこうした系統の参考書は皆無にも等しいので、いざ執筆となるとどこから手を付けてよいのか迷わざるをえなかった。そこで、これを思いきって思想的に表現することにして、第四部に「西洋福祉思想の歴史」という題名で発表することにした。もとより日本にはこうした名称の著作は全く見当らず、またその表現に当たっても独断専行のきらいも大分あり、まことに試行錯誤の一言に尽きるものである。いずれ将来十分研究の上、福祉史本来の使命に則り、内容の大幅の充実を計り、なんとかその責務の一端を果たしたいと考えている。

はしがき	1
------	---

第一部 環境歴史学の立場

第一章 歴史学と歴史的意識	7
第二章 心理歴史学の意味するもの	11
第三章 民族心理の意義	13
第四章 民族心理と文化との関係	19
第五章 民族心理と民族文化	21
第六章 民族心理と文化的諸要素	24

第二部 民族心理と民族文化

第一章 カルデア・アッシリア両民族心理とその文化	33
第二章 エジプト民族心理とその文化	44
第三章 ギリシア民族心理とその文化	60
第四章 ローマ民族心理とその文化	72
第五章 イギリス民族心理とその文化	82
第六章 フランス民族心理とその文化	92
第七章 インド民族心理とその文化	107
第八章 ロシア民族心理とその文化	120

第九章	アラビア民族心理とその文化	130
第一〇章	中国民族心理とその文化	136
第十一章	日本民族心理とその文化	139
第三部	民族文化の特色	
第一章	エジプト文化の特色	149
第二章	ギリシア文化の特色	151
第三章	インド文化の特色	153
第四章	中国文化の特色	158
第五章	日本文化の特色	162
第六章	ヨーロッパ文化の特色	167
第四部	西洋福祉思想の歴史	
第一章	福祉学とはなにか	173
第二章	平和思想の系譜とその展開	182
第三章	ギリシア福祉思想の特色	194
第四章	テューダー王朝時代の福祉思想	213
第五章	産業革命下の福祉思想	243
第六章	最大幸福の原理と公共の福祉	257
第七章	ニューディール政策の展開とその影響	277

第一部 環境歴史学の立場

第一章 歴史学と歴史の意識

いわゆるマス・コミュニケーションの発達によって、われわれの世界が日夜縮小されつつあることは、何人も否定しえないであろう。今日世界の隅々に起こる出来ごとでさえも、しかもそれがいかに直接には関係のないようなものであっても、ひとたびニュースとして報道されるならば、われわれはそれにたいして無関心ではありえない立場におかれている。

いなこのようにわれわれの関心が指向されるのは、必ずしも現在の歴史的事件ばかりでなく、また自己の民族的祖先のなした業績にたいしてはもちろん、さらに他の民族の過去の閥歴や運命にたいしても、われわれはあくことなき関心を寄せるのである。だがいかにこのように歴史にたいして貪欲であるにしても、しかしそのような態度をもってただちに歴史的真実を把握するとはいいがたいのである。われわれがどれほど世界における変転の報道を蒐集しても、またいかに多量の過去の歴史を貪り読んでも、それだけで歴史的世界の本質をとらえるとは断言しえないからである。

たしかに歴史的世界の本質をとらえるということは、歴史的世界が自己を顕現させる内面的な姿をとらえることであって、その姿の周辺のものをとらえることとはおのずから異なるものである。しかしこれに対して人あつて次のようにいかもしれない。このような歴史的事実の正しい認識は、歴史家によって現に提示されており、またその正しい認識の仕方は歴史学によって教えられているのではないかと。けれどもこれによってもまだわれ

われの内奥の欲求は、必ずしも満たされたとはいいたいがたいものがある。むしろわれわれが内奥において感ずる欲求は、種々の歴史的事件はいかにして生起するかという、いわば歴史的事件を生起せしめる根底を知ろうとすることにあり。しかもそのことこそ歴史的世界の本質に関するものといわねばならないのである。

さらにわれわれが自己の内奥において、こうした要求を持つということは、われわれが歴史学の研究によって教えらるる歴史の知識が示すところの歴史的事件が、単にわれわれの眼前に生起するというだけでなく、むしろその歴史的事件がわれわれの生活によって無関係でなかったことに存している。このように歴史的世界そのものの根底が、われわれの内奥の欲求の対象となるとき、歴史的世界の把握の仕方が、われわれの重大な関心事となってくることはない。

さてここにいるところの歴史的意识^{*}とは、歴史的认识の基礎に横たわるものであって、いわば歴史学を歴史学たらしめているものである。それはわれわれが歴史家の作品を読むさいに気づくことであるが、その作品における歴史の把握の根底には、ある一つの思维方法が潜んでおり、歴史の出来ごとはすべてこのものによって解釈されている。

こうした思维方法は、そうした作品における歴史の把握のいわば先験的(Transcendental)なものであり、それを通して歴史の出来ごとをみるものである。しかもこうした思维方法は、歴史を叙述する人間そのものの人格的なものにその根源を有しているのである。歴史的意识という語をこのような意味で用いるならば、現代のわれわれがもっとも強く解明を求めるものは、単なる歴史的认识ではなくして、それ以前の歴史的意识であるということである。

以上のように歴史的意识というものは、われわれの歴史的世界の把握の仕方を決定するものであるから、歴史的世界のうちに生起する歴史の出来ごとの認識である歴史的认识は、つねに歴史的意识によって基礎づけられて

いる。いわば歴史的認識の基礎にあってその方向を決定しているものが歴史的意識なのである。このようにわれわれが歴史的認識に対して強く引きつけられるのは、元来この歴史的認識の基礎にある歴史的意識を求めようとしているからである。もとよりこうした歴史的意識が歴史的認識の基礎にあるとしても、歴史的認識が無用であるとか、いわんやそれが不十分であるというのではない。歴史的意識はつねに歴史的認識の基礎にあって、これを基礎づけようとするものであるが、逆に歴史的認識を離れて歴史的意識が考えられるというのではない。歴史的意識の理論が歴史学によって与えられるとすれば、歴史的意識の理論はいわば超越的史学によって与えられるというべきであって、歴史的意識はすでに厳密な意味において、科学の範囲を逸脱するおそれがないでもないのである。しかしそれだからといって、歴史的意識を歴史的認識から全然切り離して、歴史の科学的研究と無関係なものとして取り扱うことはできないのである。

歴史的認識と歴史的意識とは、このように相互に媒介的關係にあることから、一応この両者は平行的に進んできているように考えられる。したがって歴史的意識は、いかなる歴史的認識に対してもその基礎にあってそれを規定しているのではあるが、しかし一つの場合にも正しい姿でわれわれにとらえられているとは限らないのである。たとえば古代ギリシアはすでに歴史の祖といわれるヘロドトスあるいはトゥキデデスを生んでいるが、それだからといって、古代ギリシア人が歴史的意識を正しくしかも明確に持っていたとは何人も主張しえないからである。

もとより古代ギリシア人がなんら歴史的意識を有していなかったとは断言できないが、しかしそれは彼らの場合には、歴史的意識がなかったというほうが正当であるような仕方では、歴史的意識を持っていなかったのである。しかもこのように歴史的意識の点で不十分であったことが、他方歴史的認識においてもきわめて不十分であったともいえるのである。

さて問題の歴史的意識についてまず第一にいわれることは、それがなにか時期を画して自己の立つ時代である特定の時期を明確に意識することと関係することである。来る日も来る日も同じ一日であり、来る年も来る年も同じ年と考えるような場合に、おそらく人は歴史的意識を持つことはないが、少なくとも歴史的意識が十分明確に把握されるためには、いつか時期を画して自己をその中にある特定の時期に属すると考えるような意識が必要である。そのような意識をヤスパーズ^{*)}（Karl Jaspers）に従って画期的意識と呼ぶことにするならば、歴史的意識というものは、画期的意識のないところには明確に現われてこないということになる。このことはわれわれがかつて現われることのなかったほど、大きな業績あるいは大きな出来ごとに直面したときに、それを画期的であるというところからも考察できるはずである。

以上のように歴史的意識は、画期的意識を俟って初めて現われるものであるが、本来の意味において画期的意識の成立は、近代ヨーロッパ社会に求められることは、ヤスパーズのいうとおりである。このように考えるならば、古代および中世の社会には優越なる意味においては、歴史的意識は明確に現われてはいないといえるのである。

もちろん、先に述べたようにすべての歴史的認識の根底には、それを規定するものとして歴史的意識が考えられるとするならば、古代および中世の社会にも歴史記述が行なわれ、しかもなんらかの歴史的認識が存在した以上、そこにも歴史的意識がなかったとはいえないのである。しかしわれわれが歴史的意識として特に取り上げて考えるようなもの、すなわち優越な意味においての歴史的意識は、古代および中世の時代からは認められぬことは、あたかも歴史記述がきわめて不完全であったことや、また歴史的認識がはなはだ非科学的であったことに平行するものである。

註

* 歴史的意識とは、仏教で説く八識（眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識・末那識・阿頼耶識）中の阿頼耶識に当るものである。阿頼耶識（ālaya）は蔵・無没とも訳しているが、元來、人間心識の根本を示すものである。すなわち「内に万有の種子を蔵し、万法縁起の本となるもの」そしてまた「眼や耳などの感覚器官が、色・声などをそれぞれ別々に認識するのにたいして、対象を総括的にとらえる心の働き、すなわち判断・分別する心の働き」を意味するものである。

** (1)にいう歴史的意識とは、ヤスパースが歴史意識（historisches Bewusstsein）と歴史的意識（geschichtliches Bewusstsein）とを區別し、historisches Bewusstseinは歴史に関する知識であり、それは歴史学における充たられる（2）に対してgeschichtliches Bewusstseinは歴史知識の基礎であり、それは根源的に人格的であると説く（3）のこのgeschichtliches Bewusstseinに該当するものである。（Karl Jaspers : Vom Ursprung und Ziel der Geschichte, 1949）

第二章 心理歴史学の意味するもの

心理歴史学〈Psychological History ; Psychogeschichts Wissenschaft ; La Psychologique Histoire〉とは、心理に関する歴史の学問的体系を意味するものではなく、あくまで心理学的歴史学の意義を有するものであって、いわゆる歴史学自体を心理学的見地において、究明・把握せんとする学問をいうのである。

元來歴史は学問的体系としては、記録や文書を対象として構成され、色々の事実が年代順に羅列され、しかも正確に記述されることをもって、歴史の真の生命なりと考えられてきたのである。従來歴史はあまりに事実の皮相的外面にのみとられすぎた感が強い。なるほど歴史は文献の批判や究明によってある程度まで真理の把握は可能であるが、応々にして思わざる誤謬なしとしないのである。それ故にわれわれは、こうした計らざる誤謬を警戒するとともに、さらにもう一步深く浸透して、できうれば何か絶対的なものを考えてみる必要があるよう

に思うのである。たとえばもし煙立つ下に必ず火ありとすれば、立ち上る煙のきをことのほか忠実に記述しても、その下に静かに横たわる火については、あまり顧みられないのが現実である。そのみならず顧みることは歴史の範囲を越えるものであるとさえ、言われていたほどである。しかし今やわれわれは、こうした方法のみにおいで、果たして満足すべきものであろうか。

それよりもっと歴史的事実の深奥に潜む何物かに触れてみる必要はないであらうか。もっと深く立ち入りたい、そして「なぜこのような結果が起こってきたのか」と言ったような考え方は、絶えずわれわれの胸にまつわりながら、この「なぜ」の解釈と説明を求めてやまないものである。しかしこうした燃えるような新たな欲求にたいしてこれを十分に満足させることはきわめて困難であり、しばしば試みられながらも、そのつど失敗に終わったところのものである。これは「なぜ」の研究に当って、もっとも必要な物が忘れられていたからである。これこそ事実の根底に潜み、しかもその原動力をなすと信じられる根本的な力である。ここでこの「ある物」あるいは「根本的な力」というのは、とりもなおさず心理学である。

ところでここにいる心理学とは、いわゆる一般心理学ではなく、小にしては個人心理学であり、大にしては民族心理学を指している。またこれを社会的・集团的にみて、群集心理学あるいは革命心理学を内包するものである。これらの心理学の深い研究によって、人類生活にまつわる色々な法則を知りえた眼で、再び歴史的事実に向ってみれば、今まで顧みるに足らずとして捨てられていた眇たる事実も、今やいちいち声を大にして新しい真理を叫ぶようになり、疑問とされた事実が、却って新たな法則として、益々心理的法則の正確さを証明する上に大いに役立ってくる。

以上のようにして、われわれはエジプト文明の奇異を積み、ギリシア文化の優美を解し、またローマ文明の没落を了解し、あるいは近代諸国家の盛衰興亡の特質をも知ることができると思うのである。今やわれわれは未知

の世界や未解の事実の解明に精進することながら、他面において周知の事実として誰しも研究の対象としなかった事実をも、もういちど別な見方から検討してみるべきときである。この意味においてわれわれは心理学的見地から再び世界史全体にたいして究明のメスを入れてみなければならない。いわばここに心理歴史学の立場が見出されてくるのである。

第三章 民族心理の意義

第一節 民族心理とはなにか

多くの種類の桜や梅を集めてこれを比較してみると、色々な点で違つてはいるが、桜には桜として、また梅には梅としての共通点があることがわかる。従つてこの共通点があればこそ、花の形や咲く時期に甚だしい相違がありながらもなお、それぞれ桜や梅として認識することができるのである。これと同じように一民族に属する個人の心理には非常な相違がありながら、しかもそこに一定の共通点が深く流れていて、これらの共通点にもとづいて他の民族と明白に区別することができる。この個人心理の中に潜在する共通点を抽象して、これを民族心理というのである。たとえば古代ギリシアにおいては、スパルタのような国家主義の盛んなところもあれば、またアテネのような民主主義の極度に発達したところもあり、そしてまたヘロドトスのような歴史家がいるかと思えばテミストクレスのような勇将もいるといった具合である。

上述のように個人個人の心理を比較してみれば驚くほど互いに相違しているにもかかわらず、それらの相違のうちに一貫した源流が暗々の裡に深く流れていて、それがギリシア民族の心理を構成していたのである。

ところでこれをギリシア民族として見ずに、他のエジプトやローマ民族と比較してみるならば、このギリシア民族の特有な心理はいっそう明白に浮き出してくる。繊細で感受性が強く、社交を好み、芸術を愛し、極度の現世主義であった彼らギリシア民族は、こうした特有の心理をもっていたればこそ、彼らの宗教は神秘的分子が少なく、未来における幸福を求めるといっても、現世における諸般の運命を神話の形で説明しようとした。そして彼らの繊細な感受性は美術に現われて、優美と簡雅を誇るギリシア美術となり、彼らの明晰な頭脳は論理を発達せしめたばかりか、さらに度を過ごして詭弁さえも流行せしめるにいたったのである。

さらにここで眼を転じて、かのナイルの河畔に炎熱と戦いながら、人類文化の曙光を放ったエジプトを見れば、個人心理としては著しい相違をもっているにもかかわらず、民族全体としては非常に神秘的であり、常に偉大と永遠とを求め、現世を否定しようとする一種の心理が強く流れていた。この心理があればこそ、「時をも恐れしめる」スフィンクスも生まれ、五、〇〇〇年の夢を昔ながらに包むミイラが作製され、またピラミッドやオベリスクも彼らの遺物として今日もなお旅人をして古代世界に赴かしめるのである。

以上のように考えてみると、各民族にはその民族のみに特有な一種の心理があつて、個人は各々色々な点で相互に非常に異なっているが、どこかにこの民族心理を共通にもっていることがわかる。この共通な心理、すなわち民族特有な心理が外部に現われたのが、いわゆる民族文化である。従つて民族文化はちょうど民族心理がその民族に特有で、他と著しく異なっていると同時に、その民族特有のものとして世界文化史上に大きく貢献しているのである。（拙著 世界史の構造 南窓社 参照）